

神楽陽子
表紙/ごまさとし

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

ザクザクッ
ミスキ
2nd



試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『ザクラリッターミズキ 2nd』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『ザクラリッターミズキ』（キルタイムコミュニケーション・刊）、二次元ぶち文庫『ザクラリッターサヤ』（各種ダウンロードサイト配信中）とあわせてお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



ガクテリッター
ミスィ
2nd

神楽陽子

表紙 / ごまさとし

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

あさくらみずき

浅倉瑞希

小柄ながら96センチの巨乳を誇る明るい少女。ザクラリッターに変身して魔貴族と闘う。

みどうさや

御堂沙耶

瑞希同様、ザクラリッターとして活躍する頼れる仲間。

プリン

瑞希の仲間で、ネコのヌイグルミに憑依した天使。

ラビアン

魔貴族の一人。オーディションに集まった少女たちからエナジーを集めようと企む。

透き通るような晴天を、いくつもの悲鳴が突き上げた。

「きゃああああ！」

人々が青筋立てて一方向に駆けていく。街はパニックに陥った。

「おい、走れ！」

「む、無理……足が、動かなくて……」

いまにも消え入りそうな声を、獰猛な雄叫びが吹き飛ばす。

『グウオオオオオ！』

トラックを突き破って、恐怖を呼び起こすモノ。全長が十メートルを超える巨軀を引き摺る大百足が、牙を左右に開いて唸る。軽乗用車は軽々と踏み砕かれ、酸性の唾液がアスファルトを融解させた。

まさに悪夢だ。ガシャガシャと車道を踏み鳴らして近づく怪物、それを直視した者は恐怖に縛られ、瞬きさえ許されない。

巨体が日差しを遮り、怯えすくむ男女を影に捕らえる。

その行く手を、勇ましい一喝が遮った。

「そこまでよ！」

振り返る魔物の前を、赤と青二色の光が横切った。節足の数本が千切れ飛び、百足の本体がのたうちまわる。

『グアア!!』

人々が表情を弾ませた。駐車場の看板の上に立つ人影が注目を浴びる。

大きな輪を背負った、不思議な女性のシルエット。それは輪ではなく、真紅と称すべきカーマインに染め上げられたツインテールだった。おさげの線が乱れぬよう、毛先近くに細やかなリボンをあしらってある。

コバルトブルーとホワイトのツートンカラーで構成された夏物セーラーは、前は鎖骨の窪みが、後ろは肩甲骨の角が見えるまで襟口を広げている。パフスリーブの袖口は肘までずれ込み、故意に着崩したように見えなくもない。

なにより下半身はスカートも肌着もなく、一枚のスクール水着。湿っているのか、深く濃厚な紺色がヌラリと艶光る。

襟の袷を飾るブローチから、鮮明なイエローのスカーフが背中までぐるりと伸びて、愛らしい蝶の形に結われてあった。

突然現れた少女は、グローブの薄生地を伸ばして嵌めると、右手に武器——と呼ぶにはあまりに華麗な、ピンク色の体操リボンを構えた。

「ザクラリッターミズキ、おつまたせ！ さあ、ドキドキさせちゃうよ！」

碧色に煌くつぶらな瞳の片目を閉じ、幼い面影を残す微笑を浮かべる。瞳と同色同形のイヤリング、戴く白銀のティアラもキラリと輝きを増した。

その背後から、もうひとり別の美少女戦士が飛び出す。

「ミズキ、逃げ遅れた人たちのことは任せて！」

「ありがとう、サヤ！ あたしはあのおっきいのをやつつけるから！」

美少女戦士・ザクラリッターミズキは、リボンを振るって大百足を挑発した。その姿にはグロテスクな生物を前にしたとは思えぬ凛々しさがある。

『グオオオ！』

怪物は巨体に任せて突進し、看板をなぎ倒したが、さらに速くミズキは攻勢に転じた。

「みんなのエナジーはあげないわよ、えいっ！」

水中を泳ぐかのように宙で前転し、リボンをしならせる。ピンク色の帯が光線のごとく直進して、百足の節足をまた一本千切り取った。

着地は刹那、次の瞬間には再び空に戻って髪とスカートの足をたなびかせる。過ぎるも欠くもなくしなやかで、比率的に長い脚は水着の際からあられもなく丸裸。トウシューズが脚線美を優雅に演出する。

セーラーの裾が短く柳腰の括れ具合は明瞭、なにより突出した胸肉が、一動作ごとに揺れ弾んで周囲の視線を釘付けにした。

食い込むレッグホールが、太腿の動きに連動して伸縮する。

「たあっ！」

光線がザクザクと百足の足を削いでいく。支えをなくして車道に突っ伏した本体めがけて、ザクラリッターミズキはそのまま以上に天高く跳躍した。

リボンが伸長し、軌跡で虚空に何かを描いていく。

「アリスティア・ハンマー！ えっえええい！」

それが直径十メートルに及ぶ巨大な槌となり、百足の頭部を真上から打ち砕く。ズッガン！

『ギヤアアアア！』

押し潰された魔物は断末魔を残して塵と化した。陥没した車道が、美少女戦士の一撃の凄まじさを物語る。

「あ……またやりすぎちゃった」

とはいえ、犠牲者は出なかった。ワツと歓声があがる。

「ありがとう、ザクラリッター！ 助かったよ」

「お疲れ様！ 本当ありがとう！」

ザクラリッターミズキはVサインで応え、相棒のサヤと共に空に消えた。

今回も無事に一件落着、屋根から屋根を跳び移りながらサヤが安堵の声を漏らす。

「まさか、巷で噂の宝石店に魔貴族が絡んでいたなんて。でもよかったわ」

ところが、今日のミズキは上の空といった様子で、

「エヘヘ」

と笑うばかり。

「ミズキ、聞いている？ どうしたの？」

「エヘっ！ 実はね、サヤ——」

翌日、地元の学園ではある教室が大歓声に震えていた。

「オーディションに合格したって、本当!!」

男子も女子も、ひとりの小柄な女生徒の席を中心に輪になっている。

「エヘヘ……昨日ね、一次審査の合格通知が届いたんだ！」

浅倉瑞希は、照れ笑いを浮かべていた。存在感にあり余る巨乳を机に乗せ、その手前でモジモジと指を編む。足も落ち着きがない。

女子の間では「相当の器量がなければ不可能」とされるツインテールも違和感なく、直立すれば毛先がスカートの裾まで届きそうだ。

二重瞼の下をくりくりと瞳が転がり、ポツリと咲く朱唇が綻んだ。机に掛けた鞆から封筒を取り出して、中身を見せる。

「じゃーん！ 黒咲^{くろみぎ}プロダクションの、新生アイドルオーディション！」

しかし意思とは裏腹に、牝花が肉羽根を伸ばしてビクンと疼いた。

（あう？）

あられもない裸の太腿をツウツと雫が伝う。日頃から吸着するスクール水着で押し揉まれているせいで、性感帯の成長は凄まじく、刺激にはすこぶる弱かった。光や熱のみならず、スタッフらの視線が肉洞に染み込んでくるのがわかる。

ラビアンを恐れてか、彼らは一言も喋らないため余計にまなざしが気になる。ライトに照らされ続けていまや暑さは蒸し風呂そのもの、意識は端々から朦朧としていた。

（はやく、はあ、なんとかしなくちゃ）

ジワジワと恥汗が湧き、薄生地を色濃く染めて肌馴染ませる。後方では尻の谷間が浮き彫りになるまで、前方では臍の窪みまでもが眼に見えた。

「く……はあっ」

腰を捻って肩を押し下げ、細身をギュウギュウと締めつけてくるスクール水着の緊縮をできるだけ緩める。ラビアンはミズキの昂りを見透かしているらしかった。

「いい気分だわ。さて、そろそろ実技に移ってみましようか」

「じつ……ぎぎ？」

零れた生乳を右手で、秘園を左手で隠して身動きひとつままならぬ美少女戦士を、ラビアンが舐めるように視姦する。

出来上がり。並み居る男が身を乗り出すのも当然だった。

ウズウズする尿口を薬指で小突きながら、耳を真っ赤にする。恥ずかしい思いはせめて短くありたい、下唇を噛んで無理に息む。肉の裏で熱い雫が滴るのを感じた。

「ん……く、んうううう！」

股布を左に引いて、丸裸の三角地帯を腰で突き出す。

（恥ずかしいのはガマン！ はやく、はやく出て……っ！）

汗ばんだ太腿をブルブルと弾ませ、躊躇にヒクつく尿口に分泌を強いる。

「んくっ！」

全身の筋が弛緩し、強張っていた肩がガクンとさがった。

チヨロ……チヨロロロロ……！

黄金色の放物線が、秘園から始まって舞台を跳ねる。さつき飲んだジュースがそのまま出ているのか、噴出は勢いに乗ってとめどなく、排泄感もひとしおだ。

込み上げる解放感について舞台の上であることを忘れ、危うい声色を漏らしてしまう。

「んはああああ……」

おまけにいつもの癖で、腰を揺すり水を切ってしまった。

「——あ！」

我に返って口を噤んでも、放尿に甘えた事実は消すことができない。愛らしい童顔には

不似合いな悪臭が立ち込め、生理現象の生々しさを物語る。

ラビアンは狙い通り、淫靡な空気が着々と醸成されつつあった。カメラマンがもどかしそうに身を振り、他のスタッフもしきりに足の位置を変える。

「やあねえ。ザクラーリッターのは、普通の人のよりくさいんじゃないのかしら？」

「そ！ そんなこと」

そのようなはずはないが、話術も巧みな魔貴族の言葉は真実味を持って聴こえた。美少女戦士に痴女の烙印を押す。

（ザクラーリッターはそんな女の子じゃないのに……！）

はだけた局部を手で隠し、脚を組んで余裕満々の仇を睨みつける。それ以外に抵抗のしようがなく、ミズキは悔しさに歯列を痛くなるまで噛みあわせた。

嘲笑で返すラビアンが、今度は豊大な乳房を指さす。

「次にいきましょうか。そうねえ……その大きなオツパイで、うふふ、チンポを何本挟めるか試してみましよう」

ゾクリと背筋が栗立った。ミズキだけでなく、スタッフたちも動揺を隠せない。

「カメラマン以外は全員、パンツを脱いでステージにあがりなさい」

「そ、そんなことはできま——うぐっ!!」

ラビアンは隣に立たされたチーフスタッフが抵抗の意思を表すや、開口したままその場

に崩れる。意識を失ったのかピクリとも動かない。

「私に齒向かってこうなるか……好きに選びなさい」

あえて選択肢を与えることで、脅迫はいっそう無慈悲なものとなった。それでも正義の味方を相手に非道には走れないのか、誰も初動を見せない。

このままでは。ミズキは決意を込めて言い放った。

「あたしのことなら、構いません。大丈夫……ですから」

ラビアンが勝ち誇って高笑う。

「アッハッハ、健気なこと！ 滑稽なくらいにね！」

男たちは無念そうにうなだれると、服を脱いで舞台に上がった。誰もが申し訳なさで表情を凍てつかせている。だが、それには別の理由もあった。

「ザクラリッター……す、すまない」

哀しくもスタッフは皆、少女の痴態に興奮を募らせていたらしく、逆光を突き破る男根はどれも欲望に漲っている。さすが成人男性だけはある、一本一本がバナナのように太くて長く、臍まで反り上がっている。カリには薄皮が突っ張っていた。

鋭くラビアンが勃起にも言及する。

「ふふふ、もうビンビンじゃない。正義の味方相手にそんなサマでいいのかしら？」
そして念を押すように人質の頭を小突いて、命令する。

「さあ、まずはそっちのあなたから。チンポを挟んでみなさい」

ミズキは怯える彼らを少しでも救おうと、膝を落として怒張と胸の高度をあわせ、自ら生乳を持ち上げた。放尿と違って形のある羞恥だ。

(あたしが恥ずかしがってたら、みんな、もつと危なくなっちゃうもん)

柔らかく、それでいてズッシリとした重感が掌に押し掛かる。親指と中指を限界まで開いてもまったく足りず、恥汗のせいかなルリと滑って蕾を弾く。

「あ、あたしのことは……いいですから」

それから濃紺の薄生地に包まれた左の果肉に指を立て、底の知れない胸の谷間をあられもなく割り広げる。腕が細くては中々の重労働だった。

右から一本の怒張が近づいてくる。

「ど……どうぞ」

美少女戦士は涙を堪え、できるだけ見まいと臉を伏せた。

異物が縦溝を下からなぞる。

(くうっ！)

押しあいへしあう双乳の隙間をムニューと貫いてくる。雄渾な剛直は窮屈な溝に瘤肉をしつかりと潜り込ませ、皮を剥きながら貫通を果たした。

間に直径三センチ近い杭を挟んでいるにも拘わらず、手を離すと、胸肉が左右とも何事

もなかったかのようにもとの砲弾型を取り戻す。

乳房を抱えるミズキ自身は、嵌め込んだ異物感を感じずにはいられない。

「んはあっ」

艶めいた吐息が口について漏れた。男根の体積分だけ乳房が突っ張り、ニップルに血液が集まっていく。

（オッパイに挟んじゃうなんて、ど……どうにかなっちゃう）

逆に男たちは押し黙りはするも、そろってゴクリと生唾を嚥下した。

ラビアンがパン、パンと手を鳴らす。

「すごい大きさね。さあ、もう一本！」

次の怒張は前にも増して肉を張り詰め、ビクンと脈打った。美少女戦士の巨乳に催す劣情を堪えきれないのか、丸裸の亀頭が先走り汁を頂く。

今度は左から、左右対称に弓なりの竿が谷間を抉った。下から弧を描くように薄生地を擦り、柔肉を断ち割っていく。異物の存在感が二倍に増し、静かな肩とは打って変わって球肉がブルブルと痙攣する。

「あ……あはあ！」

乳頭がツンといきり勃ち、めくるめく快楽電流が回路を繋いだ。跳ね上がる鼓動と加速する呼吸についていけず、藁をも掴む思いで両の乳房を鷲掴む。

「んく！ はあ……あ、苦し……！」

声には覇気がなく、臉は半分以上開かなかつた。碧色の瞳が涙を生んで潤み、汗ばんだ頬をさらに濡らす。肌が熱く火照り、甘酸っぱい牝の芳香をふんだんに漂わせた。

挟撃がよほど凄まじいのか、大の男が腰からのたうって苦悶する。

「ウ！ き、きつすぎる！」

まさかの巨乳二本挿しを前にして、他のスタッフたちも次第に息を乱す。

「はあ、つ……次は？」

それは「こんなことをまだ続けるのか」と「三本目にいってもいいですか」という、二重の意味を持って聴こえた。彼らの変化に戸惑う少女を、いくつもの眼が見下ろす。

（み……みんな？）

良心の呵責でも憐れみでもありえない、鋭いまなざしが突き刺さる。

まさか——ミズキは青ざめてすくんだ。

「うふふ、どうしようかしら……三本目、正面からまだ入りそうだけど」

ラビアンが手櫛を交えて首を傾げる。

「それじゃあ、審査員の私には見えないのよねえ……そうだわ」

そして、美少女戦士の暴かれたままの秘園を指さす。

「ザクラリッターの、生ファックされたときの表情を見てみたいわ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>